

文化女大家政 遠藤 武
和洋女大文家政 ○石橋 敏子

1. わが国の被服文様はあらゆる物象を絵画化し平面的な着物を美化してゆく所に面白味と日本人の手芸の巧みさがみられる。大麻を幾何学的に図案化し、これを連続させて紗綾形や万字繋ぎよりもより庶民化していったところにこの文様の面白さがある。そればかりかこの文様が乳幼児の着物をはじめとして大人の表着や帯までに及び、ことに歌舞伎の世界では八百屋お七の帯といえは麻の葉といわれる程である。小考では服飾にあらわれたその文様の流行と変遷について研究を行なってみた。

2. 江戸時代における絵画を中心として、その裏付けとしての文献（随筆、洒落本、黄表紙、滑稽本、人情本等）を比較検討しながら考証をした。

3. この文様は13世紀中頃の銘ある奈良西大寺愛染堂の愛染明王像にみられるものを最も古い一つの例と推考するが、小袖の表着や帯の文様としては元禄時代からで、下着に至っては比翼額仕立の流行した18世紀後半、襦衣に及んでは19世紀に入ってからである。しかも1810年岩井半四郎がこの文様を鹿の子にしてから、江戸女装界を半四郎鹿の子として老幼の別なく風靡し、ついに乳幼児の表着文様としてもてはやされることとなった。これが今日、麻が丈夫で素直に育つ民間伝承となった理由でもあった。